島根大学附属図書館報：淞雲　第4号　　平成17年3月
Shimane University Library Bulletin : Shō Un　No.4,　March 2005

淞雲

第4号

（春の息吹・ふきのとう）

2　●　こころに残る１冊　－ I LOVE BOOKS －
13　●　本学教員著作等寄贈資料紹介

14　●　2005年主要電子ジャーナル及びデータベースの利用案内
16　●　貴重資料展示公開・電子化プロジェクトについて

しまだい資料探訪（2）
18　●　『出雲国名所歌集二編』　蘆田　耕一
20　●　『元禄年中松江末次本町町内図』　舩杉　力修

22　●　研修報告
慶尚大学校職員交流 ／ 学術情報リテラシー教育担当者研修
学術ポータル担当者研修 ／ 総合目録データベース実務研修

25　●　図書館からのお知らせ
図書館見学　／　学外者へのサービス・貸出冊数
講習会の開催　／　電子ジャーナル使用上の注意

I Love Books

誰にでもある，心に残る１冊，ぜひ読んでほしい１冊を紹介していただきました。

耳の作家，マーク・トウェイン

市川　博彬　（法文学部　言語文化学科　教授）

長い間マーク・トウェイン[1832-1910]を読んできた。定年で退職する前に，この場を借りて，いま一番気になっている，トウェインが「耳の作家」だということについて書いておこうと思う。

トウェインの作品から代表作を一つだけといわれたら，まず *Adventures of Huckleberry Finn*（1884）を挙げるだろう。一般には『トム・ソーヤの冒険』の方がよく知られているかもしれないが，二つを並べてよく考えた上で『ハック』を選ぶ。理由を説明している余裕はないし，ここは『ハック』論を展開する場でもない。「耳の作家」に関連して，急いで記しておく。

『ハック』を開いたとたんまずそこにあるのは，作者からの「警告(NOTES)」と次のページの「断り書き(EXPLANATORY)」だ。トウェインは物語本体より，さらに目次より前にこの二つを置いた―どちらも小説の本文ではないから，日本語訳では落とされることもある。本書とかかわると「告訴され」，「追放され」，「銃殺刑に処せられる」という警告は，それなりにパンチの効いたユーモアだが，その次の「断り書き」は，一体これは何だろう。

> この物語では方言を多用した。たとえばミズーリ州の黒人の言葉，アメリカ南西部の奥地で聞かれるなまりの強い言葉，それと「パイク地方」の言葉―これについてはこの地方で普段に使われるものの他に，かたちを変えて４種類使った。いい加減な見当をつけて使ったのではない。細心の注意を払い，苦心して登場人物によって使い分けたのである。私自身，耳慣れた言葉だったから，使い分けには自信がある。
>
> こんな断り書きをつけたのは，登場人物たちが似たような言葉遣いをして，しかも読者に通じないといわれそうだったからである。　　著者　マーク・トウェイン

小説の本文は，自然児ハックによる語りということになっている。１頁目から，“The widow Douglas, she took me for her son, and allowed she would sivilize me.”とある。“sivilize”は，辞書をどうひっくり返しても載っていない。“civilize”だろうと予測はつく。しかしそれならハックが子供同士で交わす会話やジムが喋る言葉が分かるか。Yea, これが分かったのだ。

目で，ときどき綴りを正字法で書き直して辞書を繰ったり，*A Mark Twain Lexicon* なる書物に当たり直したりして，それでも黙読している限り分からなかった個所が，声に出して読んでみて突然分かることがあるのに気がついた。活字の奥に，音声を通していわば耳で読むハックの物語があったのは，驚きの発見だった。通常の読みで得られる内容と筋においてそれほど違いはないだろう。けれど受けるインパクトというか，ハックを通じてトウェインの肉声を直に聞いているような臨場感は，黙読したのではけっして得られない。

ハックは最後の場面でもう一度“sivilize”と言う。もう“civilize”に置き換えることはないが，それはSとCの間には代置不可能な質量の差がある，Sはたんに Cをひっくり返して下にもう一つ続けただけのものではないのが分かっているからである。

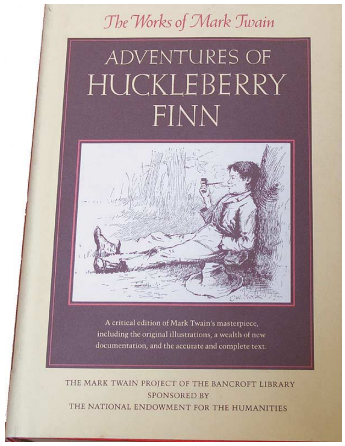
「断り書き」の主意は，読者にハックの語りをじかに聴いて，彼がそうしたように「良心」ではなく「こころ」の声に従って欲しい，ということではなかったか。

トウェインが言葉の原初にある響きをことのほか大切にしたのは，いくつもの例を挙げて示すことができる。彼の講演家(lecturer)としての活動その他，あれもこれも気になっている。トウェインは作家というより話し手であり，書いた物の根底に話し言葉がある。そのことを「耳の作家」という一言で表したかった。

この稿の最後に，ラフカディオ・ハーンにふれておこう。物理的に視力の弱かったハーンもまた，トウェインとは違う意味で「耳の作家」だった。二人は実際に会ったことがあるかもしれない。そ

の時ハーンはニューオリンズ『タイムズ＝デモクラット』紙の文芸部長をしていた。トウェインは『ハック』と同時進行で書いていた *Life on the Mississippi* の下調べに，久しぶりにニューオリンズを訪れていた。1882年4月から5月にかけてである。『ミシッシピ河』は1年後1883年の5月に出版されたが，『タイムズ＝デモクラット』紙への言及や記事からの引用が随所に見られる。ことに45章では同紙の編集主幹の文才をめずらしく褒めちぎっている個所があり，1882.3.28 付の長文の記事を「付録A」として再録している。一方ハーンは，『ミシッシピ河』が出版されるや，5月20日という早い時期に書評「川を想う（マーク・トウェイン）」を書いた。トウェインの研究書に一部が引用されていたのを見ただけだから何とも言えないが，それにつけても二人の「耳の作家」は，どんな声でどんな話をしたのだろうか。

（いちかわ　ひろよし）

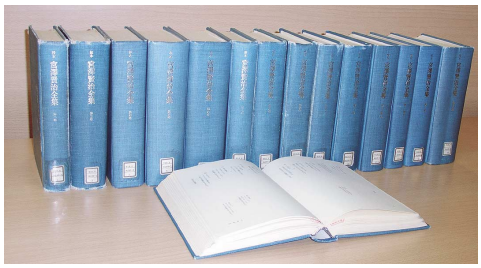


図書館所蔵

『Adventures of Huckleberry Finn』
『ハックルベリィフィンの冒険』
『Life on the Mississippi』
930.8 933 938 など / TW (本館書庫)

個人全集との出会い

木村　東吉　（教育学部　言語文化教育講座　教授）



編集子からの要請は，私にとって思い出深い「この一冊」を紹介せよということです。学生の皆さんの参考になることを願ってのことでしょう。しかし，これは私にとって難しい課題です。記憶に残る本は幾つもありますが，その中から今でも皆さんの参考になる本を選ぶとなると，一冊には絞り込めないからです。

例えば私が大学に入って，初めてふれたやや学術的な本といえば，波多野完治の「文章心理学」ですが，これなどはもはや歴史的遺産でしかないでしょう。これを皮切りにして文体論に夢中だったころは，オグデン・リチャーズの共著『意味の意味』や吉本隆明の『言語にとって美とは何か』も時間をかけて読みましたが，これらについて，40代のある研究者と話しているとき話題にしましたら，「その本何？」という顔をされてしまいました。これらに比べると，三好行雄の「作品論の試み」などは，これにふれた時，自分が求めていたものに出会ったような気がしたものですし，現在でも読むに値する本だと思います。最近三好行雄著作集も出ましたから，読みやすくなっています。けれど，その後，構造主義が流行し，ポスト構造主義が台頭し，テクスト論が一世を風靡し，続いてポスト・テクスト論らしきものが出てきた現在，私の貧しい読書遍歴など，意味はないでしょう。

そうした中で，『校本宮澤賢治全集』（筑摩書房）との出会いは，先のような本との出会いとは異質の体験でした。文体論研究から研究生活に入った私にとって，信頼するに足るテキストを得ることがいかに困難であるかを身にしみて感じていた時，以後の個人全集のモデルとなったこの全集に出会えたことは，衝撃的でした。作品がいかにして生まれたかを知るためには個人全集を読むべきだ，と教えられたのは小林秀雄の評論によってでしたが，これは大学で卒業論文を書く時の必須条件でしたので，当然のことと思っていました。しかし，

発売時は評判の高かった文圃堂版『中島敦全集』も，筑摩版全集が出てみるとその不備が目立ち，さらに原稿調査をしてみると，筑摩版全集も全面的には信用できないことを知ったころだったので，草稿の全段階が厳密に翻刻されている『校本宮澤賢治全集』には，最初から畏怖の念のようなものを感じました。

しかし，この全集は校訂が厳密であるだけにかえって謎に満ちているのです。その謎を解くために，猛烈な書き込みがある生原稿と比較するようなこともしてみると，全集が次第に理解されてくるのですが，それにつれて一人の詩人の創作過程の謎が顕在化してくるのです。さらに創作過程が多少とも見えてくると，こんどは詩人の精神運動の飛躍の大きさが，巨大な謎となって迫ってくるのです。こうしてこの全集の虜になっているうちに，月日は過ぎたというのが私のいつわらぬ印象です。この全集も現在はさらに改訂が進められていて『新・校本宮澤賢治全集』の完結がようやく間近です。

こうしてみると人文科学の世界でも，一冊の本が権威的光を保ち続けるという時代ではもはやないのかもしれません。しかし，一人の天才詩人が残した精神の軌跡は，一度その魅力にとりつかれた者にとって，果てしない謎の洞穴のように私たちの前に立ち現れるようです。そうした謎の巨大洞穴を洞穴のまま掘り出して見せたのが，入澤康夫・天澤退二郎による『校本宮澤賢治全集』なのです。これこそは，編集者の巨大な思想によるものだと私には思われるのです。

（きむら　とうきち）

図書館所蔵

『作品論の試み』　910.28 / MI91(本館書庫)
910 / MIY (分館開架)

『校本宮澤賢治全集』
『新・校本宮澤賢治全集』
918.6 / MI89 (本館開架)

「實驗醫學序説」という本の衝撃

内藤　富夫　（生物資源科学部　生物科学科　教授）

高等学校に入ると，便利のよい通りがかりの廊下横にあった図書室にしばしば立ち寄るようになった。しばらくして，そこでアメリカの物理学者ジョージ・ガモフの「不思議の国のトムキンス」などいわゆるガモフ全集を発見した。当時本といえばまだ学習参考書か小説ぐらいしか頭になかった。しかしガモフ全集は科学的な啓蒙書としてこんな本もあるのかという強い驚きを与えてくれた。ガモフ全集は高校時代に最後まで離すことのできない本であった。

大学入学後わずかして，生涯の恩師となる渡辺宗孝先生に郵便局で偶然にお会いした。「あそびにおいで」と言って下さったので日を変えて研究室におじゃました。部屋には本と実験器具がいっぱいに積んであった。部屋に入ると，大学の先生の部屋というのは高尚で学生は背筋を正して入るべきところという気持ちで緊張しながら目に入る図書や器具の配置を眺めていた。そこで先生と何を話したかいまはもう記憶にない。帰り際に先生は，「内藤君，この本は読んでみる価値がある。」といって本棚から取り出して貸して下さったのが「實驗醫學序説 / クロード・ベルナール著，三浦岱榮訳」（昭和23年，創元社（大阪）発行）であった。

この本は，ひとたび目をとおすや，息がつまるほどに衝撃的であった。同時に，それまでのガモフから卒業したと感じた。ベルナールは，観察とは何か，実験とは何かを説き，観察者，実験者の意味を説き，実験による実証をとおした真理探究の方法論を展開していた。実験は「構想」に従っておこなわれるが，自己の「構想」に執着してはならないこと，科学は正しいということが優先される絶対的真理ではなく相対的真理であるという

こと，科学探究においては精神の自由の確保が原則であり，哲学的，宗教的，科学的信仰から解放されなければならないことなどが主張されていた。いわば，科学の本質が説かれていたのである。また，実験的実証法を取り入れた生物科学・医学に対する概念も恐ろしいほどに胸を突いたのであった。

この本は簡単に読み飛ばせる本ではなかった。字を指で押さえ，同じ行を繰り返し読み直し，一字一句逃さず，前や後ろと行きつ戻りつしながら，大げさにいえば脂汗を流しながら読み終えた本であった。

その後生理学を専攻し，生理学者クロード・ベルナールの生理学的業績を知ると共に実験的探求法を説いた「實驗醫學序説」は私の生理学的概念のよりどころとなり，また学生に対して研究概念を講義するもととなった。お借りした本は渡辺先生にお返ししたが，すぐに古書店をたずね，それから苦労してやっとお借りした本と同じ實驗醫學序説を手に入れた。これは私が最も価値をおいている本である。島根大学図書館にも１冊が保存されている。實驗醫學序説の原本は1865年に発行されている。時が経ち，批判もある。しかしいまも内容の輝きは失せていない。

（ないとう　とみお）

図書館所蔵
『實驗醫學序説』　900 / 54 / 1 (本館書庫・松高)

書物が与えてくれたもの

帶刀　禮子　（医学部　生命科学講座　助教授）

読んだ本の数は少ない方だと思う。しかし出会いそして忘れ得ぬ書物となったものは幾つかあった。それは私の生き方，価値観となって生きている。思いつくままに書いてみたいと思う。

小学４年の夏休み，私はまず１冊目に出会った。「まごころ」(作者不詳）という本は，私と等身大の小学生を主人公にした短編集で，親や家族の愛情と主人公のわがままが縦糸と横糸として描かれた，人の優しさや思いやりの大切さをうったえる，真心の本であった。この頃の私は悪知恵を働かせては，お手伝いをすっぽかして友達の家に遊びに行くことがあった。そんな私に「まごころ」は思いやりの心をさとしたのだった。本を読んだ後に改めて観察すると，今まで当たり前に思っていた親の愛情の深さが見えてきたのである。その後，私はどんな場面でも言い訳は一切しなくなり，そしてそれが，今の私の生き方につながっているのである。大切な１冊である。

２冊目は３０代初め頃，何気なく読んだ山本周五郎の作品であった。周五郎の作品というと大衆小説，三文小説のイメージがあったが，柳橋物語，五瓣の椿など，周五郎の４０－６０代に書かれた作品には，キラリと光るものがあった。「柳橋物語」は，江戸の下町を舞台にそこに繰り広げられる庶民生活を描いた作品で，人の心の優しさが心に響いた１冊である。「柳橋物語」をきっかけとして，私は周五郎の世界からも，人の心について学ぶことになる。

周五郎の作品の中では異色といわれる「五瓣の椿」も心に残る１冊である。この長編の主人公おしのの母親おそのは老舗の家付娘で，手代だった婿養子の喜兵衛を軽蔑し，派手な浮気を繰り返していた。労咳を患い死期を悟った喜兵衛は娘に自分を老舗の寮へ運ばせるが，その途中で息をひき

とる。母おそのはその時も若い役者と浮気をしていて，父親の遺体が安置された同じ邸で役者と２人で酔いつぶれていた。おしのは寮へ運ばれる戸板の上で，父喜兵衛が語った最期の一言を，母親に問いただした。おしのは母親の密通による不義の子であった。「手代上がりの子でなくてよかったろう。実の父親は資産家なんだから」とおそのは言った。おしのは，忍耐一筋に老舗を支え，そして自分を慈しみ育ててくれた父親の胸中を思い，絶望感にさいなまれた。そしておしのは，世の中に法では裁けない罪があることを知り，自らの手による清冽な復讐をはじめる・・，といった物語である。もしおしのが血の繋がりに寄り掛かり安住の道を選ぶなら，喜兵衛の不運な人生に同情しつつも，死別した時点で切り捨てても何の不都合もなかったはずである。いやむしろ非常に楽な生き方であったはずである。しかしおしのは血の繋がりよりも心の底で繋がり，命で触れ合う真実の人間同士の絆を選んだのだ。私はその頃，親のセーフティネットから出て十余年，人の世の難しさにおしつぶされそうになっていた時期でもあり，心を打たれた。確かに法では裁けない罪がなんと多いことか。自分の都合ばかりを優先する人間のなんと多いことか。周五郎の作品は「人生の内なる光と闇を見つめる厳しい眼差しと，ひたむきに生きる人びとへの魂の励ましがある。」（早乙女貢「わが師・山本周五郎」より）と，私は思う。そして周五郎文学は，このキラリと光るものをゆっくりと私の心の中に押し込み，それは切ないまでに心に響いてくるのである。

このように私は，人生のあらゆる場面において，誠実な心と思いやりの心を書物より学んだのである。

（たてわき　れいこ）

図書館所蔵
『山本周五郎小説全集』　913.6 / Y31 (本館書庫)
「柳橋物語」「五瓣の椿」も収録されています。

Ms　ﾊﾟｰﾙ･ﾊﾞｯｸ著『母よ嘆くなかれ』（松岡久子訳）

光岡　攝子　（医学部　臨床看護学講座　教授）

パール・バックさんは，中国を舞台とした「大地」でノーベル文学賞を受け，文学者として高い評価を受けている方です。本書は，パール・バックさんが知的障害であった娘のキャロラインさんを抱えて，母親としての体験を綴ったものです。原題は「The Child Who Never Grew」（決して成長しない子）です。本当はそんなことはなく，遅れを持った子も成長していくのですが…。

この書物が発表されたのが1950年，実際にキャロラインさんをニュージャージ州の養護学園を「娘の永遠の家」として託されたのは1930年のこと，この時代の書物としていかに歴史的な重みのあるものであるかということは，大学時代にこの書物と出会った時には実は全く分かっていませんでした。かの有名な「大地」の作者も一人の母親なんだなと，しかし母親としてなんとすばらしい方だなと心から感動したものです。

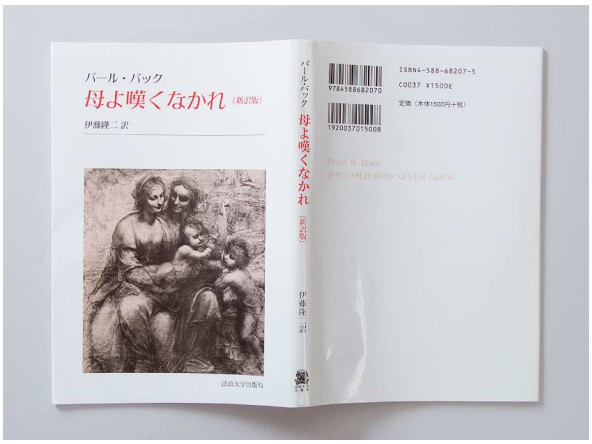
長い歳月をかけてわたしが悟ったこととして親である方々に申し上げたいと，パール・バックさんはこう述べています。「あなたのお子さんもまた，どんな人生を送るにしても，生きる権利と，幸福になる権利があるのです。……あなたのお子さんを誇りに思い，あるがままをそのまま受け入れてほしいのです。……あなたのお子さんが存在していることはあなたにとっても，また他の全ての子どもたちにとっても意義あることなのです。……」。また，「人の精神は全て尊敬に値すること」「人はすべて人間として平等であること」「人はみな人間として同じ権利を持っていること」「傲慢にならずに，自分を低くすること」といった人間の本質を「娘が私に教えてくれました」とあります。

初めてこの書物に出会った頃，私は精神衛生講座に研究生として残り，東京大学医学部附属病院分院の精神神経科にでておりました。ちょうど自閉症が注目され始めた頃で，児童外来には多くの自閉症児を抱えて途方にくれたお母さん達が来られていました。その後，東京都港区立中学校の特殊学級で知的障害の子どもたちの教育に従事しましたが，ここでも障害児を抱えて切なさや辛さでいっぱいの親たちに，私は何もできないでいまし

た。そのたびに，パールバックさんが悲しみに耐え，やがて障害を受容して道を切り開いていった苦悩の長い道のりを綴ったこの手記を開いたものです。

今や時代は変わって，知的障害児に対する差別や偏見はなくなり，全ての人々がともに補い合い，ともに助け合って生きていくノーマライゼーションの精神が浸透してきています。しかし，全ての人が生まれてきて良かったといえるように，もっともっと世の中は変わっていかなければならないと思うし，看護職もがんばらなければいけないと思います。私が初めて手にしたこの書物は，松岡久子さんによって法政大学出版局から1950年に出されたものでしたが，蔑視語が使われていることが問題であるとし，1992年に東京大学の伊藤隆二先生が改めて全文を訳され，同じ出版社から刊行されています。今改めて読んで，遙か昔に感動した以上に深く心打たれるものがあります。

（みつおか　せつこ）



図書館所蔵
『母よ嘆くなかれ』　936 / PEA（分館開架）

印象に残る本

高安　克已　（副学長）

私が通った東京下町の高等学校は，なぜか旧制中学時代から文学者を多く輩出し，おまけに担任が国語の先生だったこともあって，芥川龍之介や堀辰雄，立原道造など,「先輩の作品だから」という理由だけで半ば強制的に読まされた。文学作品は嫌いではなかったが，これだけ積まれるといささかうんざりしたものだった。それでも夏休みが終わるころまでにはひととおり「宿題」を読了し，道造の詩のひとつやふたつは諳んじるまでになっていた。今でも時々，本棚の隅にある文庫本の詩集を開き，文学青年ぶっていたあのころを思い出して苦笑することがある。

大学に入ってからは，ちょうど学園紛争の真っ最中で，学生のストライキや当局側のロックアウトで2年あまりの間ほとんど授業がなかった。それで，友人達と喫茶店に屯し，哲学や政治の小難しい議論をする毎日が続いた。そんな中で自分の生き方についても考えることが多くなったようだ。

当時の私に少なからず影響を与えた本の一つに，末川博先生が書かれた『生きるということ』(雄渾社刊)がある。末川先生は当時，立命館大学の総長をしておられ，若い人達の生き方や学問をする意味について，学生に語りかけるように平易に書かれていた。ページの隅のかすれたメモによれば，1969年 6 月 2 日にこの本を購入し，6 月 6日に読了している。200ページ足らずの本にしてはかなり丁寧に読んでいたことになる。今読み返してみると，自分の心の揺らぎがその頃どんなものであったのかがわかって面白い。

もう一冊，印象に残っている本がある。それは，俳優の宇野重吉が書いた『新劇・愉し哀し』(理論社刊）というエッセイ集で，やはり 1969 年に購入している。宇野重吉は劇団民芸の創立者であり，渋い語り口とユニークな表情が印象的な，私の好きな俳優のひとりであった。息子の寺尾聡の演技が近頃，めっきり宇野重吉のそれに似てきたのが，私にとってはうれしい。この本の中で宇野は，戦時中の厳しい統制下での演劇活動や戦後の新劇運動について，親友の滝沢修との多くのエピソードにもふれながら，静かにユーモアを交えて語っている。彼はすばらしい俳優であったと同時に優れた演出家でもあった。演出を通して多くの若い俳優たちの個性を引き出し，文学作品を新たな芸術として表現する，そのプロセスは今読んでみても

多くのことを教えてくれる。彼は穏やかだが強い人であった。

自分の人生と重ね合わせて過去に読んだ本のページをめくっていくと，忘れかけていた当時のさまざまな思い出が静かによみがえってくる。私の本棚には捨てるに捨てられない古い本がまだ何冊も残っている。

（たかやす　かつみ）

図書館所蔵

『新劇・愉し哀し』　289.1 / U77 (本館開架)

ペーパーバックを友として

木佐　剛典　（附属図書館　総務係）

高校時代初めてペーパーバックを手に取ってから早いものでもう29年になります。洋書なのでとっつきにくく感じる人もいるかもしれませんが，慣れてくると外国の文化が直に伝わってきて楽しいものです。

＜英語資格試験に効果的＞

ペーパーバックの実利的な効用です。ストーリーを追いながら英文を読むことは読解力をつけるのに最適です。TOEIC, TOEFL, 英検などを受験したい人や，読解力に限らず英語力全般を向上させたい人には特におすすめします。

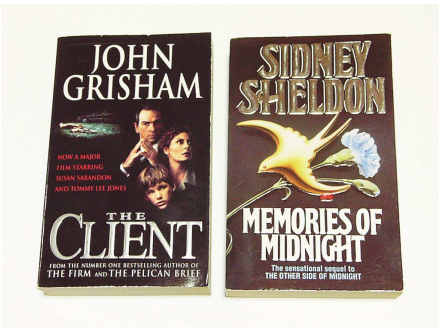
大切なのは，短い時間でも毎日読むことです。読みながら英文のパターンを憶えることができるので，日本語に訳すことなく英語のまま理解することができるようになります。効果が現れるのはリーディングだけでなく，リスニングも確実に上達します。聞こえてくる英語を英語のまま理解できるようになれば流れてくる英語が自然に理解できるようになります。また，おぼえた英文のパターンは当然，作文，会話にも応用できます。いつの間にか英語が書ける，話せる自分に気がつきます。実用英語と言えば，聞く，話すが強調されがちですが，実は読むことは効果的な基本練習です。

＜英文は頭から読みましょう＞

読み方ですが，辞書を使うのは最小限にしましょう。辞書をひくのがおっくうになってしまうと読む楽しみをそこねます。キーワードがわからなくても先を読んでいくと内容がつかめてきます。英文は関係代名詞などにかまわず，左から右に素直に読んでください。例えば，“I bought the car which was advertised on the net.”という英文は，「私は，インターネットに広告が出ていた車を買った。」と訳すのが学校で教わる英語ですが，「私は／買った／車を／広告があった／ネットに。」と頭から訳します。できればこれを日本語にすることなく英語のまま状況を理解してみてください。まず，簡単なものをたくさん読んでみましょう。

＜面白い表現に出会えます＞

ペーパーバックを読む楽しみのひとつは，現代英語独特の面白い表現を発見できることです。例えば，She traded in her school uniform for the military cloth. これをそのまま日本語にすると，「彼女は学校の制服を下取りにして軍服を買った。」となりますが，まさかそんなことはありません。「彼女は学校を卒業して(または，やめて)軍隊に入った。」となります。こんな言い回しはネイティブの作家でないと思いつきませんね。



＜私のお気に入りの作家＞

おすすめしたい作家はまず，Sidney Sheldon（シドニー・シェルダン）。If Tomorrow Comes（明日があるなら），Master of the Game（ゲームの達人）などの作者で，読みやすい英文とスリリングなストーリーで一気に読めます。どれを読んでも後悔しませんと言い切りたいほど夢中になれます。小説の舞台はアメリカだけでなく，作品によってイタリア，フランス，スペイン，南アフリカなど広くカバーしているのも興味深いところです。

次は John Grisham（ジョン・グリシャム）。映画にもなった“The Client”（依頼人），“The Firm”（法律事務所）の原作者です。名声と富を追うアメリカの弁護士社会の表裏と，正義追求の理想，また，アメリカの南部社会の貧困や保守性を赤裸々に描いて，あまり知られていないアメリカの姿を伝えています。行った事もないアメリカ南部の暮らしぶりを読みながら不思議と懐かしさをおぼえてしまうほどのリアルさを感じます。

＜買い方，選び方＞

残念ながら，ペーパーバックは松江・出雲では入手困難です。米子の「本の学校」に多少あるけれど，インターネットを使ってアマゾンで購入するのが安価で早い方法です。

初めて読む人には100～200頁くらいの簡単な小説が良いと思います。最初の1冊を読む道のりは努力がいるかもしれませんが，１冊を読み終わったときには確実に英語力が向上しています。そして最初に読み終えた１冊は，生涯忘れられない１冊になってくれます。

（きさ　たけのり）

司馬遼に出会えて

島田　哲男　（生物資源科学部　生態環境科学科　2年）

私が本格的に文学的な本を読み始めたのは高校の終わりの頃だった。予備校の友達に司馬遼太郎のことを聞かれ，まったく答えられなかったことがきっかけである。その友人は私のあまりの無知さ加減に驚いていたようだった。確かに，その頃の私はまったくといっていいほど本というものに疎かった。だが，その無知さでそこまで驚かせるものなのかと，少し腹立たしかった。

そこで，私は漫画などを一切置いていない文学的な本屋に行って，店員に司馬遼太郎のお薦めの一冊を聞いてみた。そこで出されたのが「竜馬がゆく」であった。全部で八冊もあり，正直読める気がしなかったが，店員が「すぐ読めますよ，夢中になれるはずです。マジで。」と押してきたので，とりあえず試しに一冊買ってみた。

驚いた，ここまで人を引き寄せることのできるものがあるとは思わなかった。初めてそこで本をあまり読まずに生きてきたことを悔やんだ。だが，もしその時期よりも早くに「竜馬がゆく」に出会えていたとしても，感動があったかどうかは誰にもわからないことだ。今思うと，あの時期がちょうど良かったのかもしれない。

この本から感じた一番の印象は，信念を持って戦う人間の強さや，時代の儚さのようなものである。私は若輩者であるため，ここはうまく言葉には言い表せない。悪しからず。

ここからは，竜馬を筆頭に幕末に生きた人についての感想を書きたい。

まず，竜馬は誰しもが藩という体制に縛られ，日本という概念が根付いていない頃に，日本国という意識を持ち国事を見据える事ができていた。そこが，他の維新志士との大きな違いだと思う。竜馬は従来の古い考え方に縛られることなく，新しい考え方を受け入れることのできる器を持った人間であった。彼は維新成立後の政府の役職に目もくれなかった。彼はただ国を憂い，奔走したのだった。彼は権威や名誉を求めることに興味がなかったのである。

これほど世に，そして，時代に必要とされておきながら，時代が竜馬を見捨てるのは早かったのである。無情である。

彼は人を寄せ付ける不思議な魅力に満ち溢れた人間であったと思う。下からは慕われ，上からは信頼されていた。今日でも竜馬を祭っている墓には線香の火が耐えないと聞く。

次に読んだ本は「燃えよ剣」であった。まず題名に惚れた。この本は「竜馬がゆく」とはうって変わって，竜馬などの維新志士が敵対する組織である新撰組の副長，土方の生涯を描いた作品である。彼は崩壊していく幕府に，最後まで忠義を尽くした。

新撰組は非人道的な殺戮を繰り返した集団であったかもしれない。彼らのとった行動は時代の行く末を見据えることができず，時代の流れに逆行

することになってしまった。彼らは往々にして無知であり，思想というものを持っていなかったからである。

だが，そこに無知であるがゆえの一途さのようなものがあったように思えた。だから，彼らは己の信念を裏切ることなく，それこそ本当に命を掛けて貫いた。そこに，私は感動した。今の時代，どれだけの人間が信念を持ち，自分の命やそれに等しいものを掛けて戦っているだろう。不謹慎であるかもしれないが，私はあの人たちをかっこいいと思った。

司馬遼太郎は，こういったバックグラウンドを持った人間たちの生き様の描き方が実にすばらしかった。彼の文章はまさに“活字”で構成されていた。戦いの最中では竜馬や土方の白刃の動きをありありと想像することができ，また，政治的なやりとりの際は息が詰まるほどであった。

私がこれらの本を読んで思ったのは，人と人や，ものと人が出会う時，そこに何らかの意志があれば，それは偶然ではなく必然ではないか，ということである。何かの目的に沿って行動した結果，その二つの直線が交わるのだから。

私はこれらの本のおかげで，必死に生きてみようと，そう思えるようになった。今の時代は努力さえすれば何とかなる可能性は大きいし，理不尽な死もあまり無いのだから。まあ，あの時代であったからこそ，必死に生きられたのかもしれないが。だが，それは不毛な問いかけなのでやめにしよう。なんにせよ，私は日々を無駄に過ごしたくない，そういう思いが強くなったのだ。

ところで，この前の帰省時にその本屋に行ってみたのだが，もうそこには本屋はなかった。やはりこのご時世，ああいった本屋は流行らないのだろうか。彼にお礼が言えなかったことは非常に残念である。

これらの本はどれも一読の価値のある本である。是非お勧めしたい，あの時の店員のように。

（しまだ てつお）

図書館所蔵
『司馬遼太郎全集』　918.6 / SH15 (本館開架)
「燃えよ剣」「竜馬がゆく」も収録。

「私の人生に関わった一冊」

～ 犠牲（サクリファイス）～　柳田邦男著

松原　夕子　（医学部　医学科　5年）

人生に関わった一冊（影響された本）をテーマにというお話を受け，一番に思い出した本は「犠牲」であった。この本を始めて手に取ったのは，高校3年生の夏だった。

元々私は幼い頃から家族や友人の死に関わる機会が多く，その死は，私も含めその人間に関わる全ての人にとって，とても辛く悲しい出来事であった。その経験から，当時自分にはできなかった事を少しでも多くの患者さんにしてあげたいと思って医師を志し，現在に至っている。

私が「犠牲」に心惹かれたのは，サブタイトル「わが息子・脳死の11日」だった。当時，脳死を人の死として認めるか否かが激しく議論されており，私も脳死及びそれに伴う臓器移植の問題について自分なりに考えていたので，興味を持ち，読んでみることにしたのである。

この本は，著者本人の息子が，心の病に苦しんだ挙句自死を試み，脳死状態になった後，亡くなるまでを描いたものだ。彼は生前，対人緊張・対人恐怖が強く，大学を挫折し，社会に出て働けるようになる見通しもつかないでいたため，誰の役にも立てず，誰からも必要とされない存在となっていることを非常に悩んでいた。「自分はこの世に生まれて誰の役にも立てなかった」という彼の悔いを打ち消すため，著者は息子の死後，腎提供を決意する。表題の「犠牲」は，精神病の主人公アレクサンデルが人類を核戦争の危機から救うために，自分の家に火を放って神への「捧げ物」とし，自らは精神病院に収容されるという内容の映画「サクリファイス」からとられている。また，＜私達が一日一日を平穏に暮らしていられるのは，この広い空の下のどこかで名も知れぬ人間が密かに自

己犠牲を捧げているから＞だという作者タルコフスキーの宗教的思想にも惹かれる部分があった。

私はこの本を読み，脳死とは何か，死とは何か，臓器移植について，また生きるとは何か，尊厳死とは何か等について，とても深く考えさせられた。

一番よく覚えているのは，医療スタッフが，著者に「私たちは，脳死の患者さんでも，生きている一人の人として，最後まで精一杯の努力をさせていただきます」と言った部分だ。

脳死が問題となるのは，本の最後で著者が述べる様に，死者自身ではなく，残された者に対するケアの時間が必要なためであろう。死に逝く者は死んでしまえば戻っては来ない。霊魂の存在を肯定したとしても，死者自体が人権を称えることはない。残された者が死者を通してみる世界，遺志を受け継ぐ，といった死者という鏡を通した自分の気持ちの整理には時間が必要だ。その時間は短いかもしれないし，長く続くかもしれない。しかし，どちらにせよ，脳死判定を終え，たかだか数分の別れの時間を持つだけで，長く続くであろう傷への準備が済むとは思えない。

しかし，それでも臓器移植が推進されるのは，第三者である者が生き長らえられるという利が大きいからだろう。脳死が人の死として認められ，判断基準が定められば，臓器移植が可能になり，誰かの命が救われる。確かにすばらしい事だと思う。しかし，私はその事によって，脳死患者の命と，それによって臓器提供を受けて助かる人の命とが，天秤にかけられ，そして二度とは戻らない脳死患者の命よりも，移植を受けて助かる命の方に重きがおかれるのではないかと思った。脳死患者で臓器移植を拒んだら間違いだという考え方も出てくるのではないか。私は，前述の言葉から，どの人の命の重みも平等である事を忘れてはいけないと強く感じた。

また，長男が医師に対して「ただ弟の臓器を利用するというのでなく，病気で苦しむ人を助ける医療に弟が参加するのを，医師は専門家として手伝うのだ，というふうに考えてほしいと思うんです。」との言葉も私の胸をついた。

もう一つ印象的だったことは，著者が「死」を人称で分けて，三つに分類していたことだ。

一人称の死，それは自分がどのような死に方を望むか。二人称の死，それは人生と生活を分かち合った人間が死に逝く時どの様に対応するか。三人称の死，それは第三者の立場から冷静にみられる死。著者は，医師にとっての患者の死は，いかに熱心に治療を試みた患者であってもやはり三人称の死の次元だと述べている。私たちは医者になり，病気で死に逝く患者さんを前にした時，一体何人称の立場でいるべきであろうか。私は，二人称と三人称の間にいたい。そして一人称の死を支えていける医者になれたらいいと思う。

さらに，本の中で，人を生かす技術などについての見解も述べられていた。あらゆる領域で，そんな技術の進歩が待たれているのは確かだ。いまやクローン人間だって作れる。大学での講義中，O教授がこんな事をおっしゃった。「クローン人間を作っていいのかどうかを皆倫理的問題として議論するけれど，つくれる技術が存在する時点で，我々が考えるべき事は，そのつくられたクローン人間をいかにして‘クローン’とつかない一人の人間として尊重していくべきかだ」。それを聞いて私はO教授の考え方に新鮮さと尊敬の念を持った。

柳田さんの著書で私が読んだ本は「死の医学への日記」「死の医学への序章」等々。また「MY NAME IS TODAY」「鈴の鳴る道」「人間失格」「高瀬舟」「井戸を掘る人」「斜陽」などからも学ぶ事は多かった。本だけでなく音楽からも得られたものはあった。モンゴル800の歌詞「人に優しくされた時，自分の小ささを知りました」うたいびとはね曲「なんだったけ」，ブルーハーツ，ジャパハリネット，BILLY JOEL，GREEN DAY などなど。

私は今まで，本や漫画，TV，映画，歌，様々なものから影響を受けた。しかし，それはあくまで間接的な経験にすぎない。私は臨床実習や病院見学に参加し，実際の患者さんやご家族，医療スタッフと話をし，自分が直接一人の人間として，相手と話をすること程自分の価値観に影響するものはないと痛感している。自分の肌で感じる人とのふれあいは，どんな難しい本から得られる事よりも大切なものではないかと考えている。

ただし，本等から得られる知識も絶対に無駄ではない。それを通して色々な人の考え方を知ることが出来るから。人はそれぞれちがう考えをもって生きている。「犠牲」での著者の脳死の捉え方，迷い，不安などはあくまでこの著者だからこその感性。しかし同様に家族の脳死を実際に経験した別の人は，また違った考えを持っているかもしれない。

医者になる私たちに求められるものは何であろうか。それは様々な考え方を持つ人がいる事を忘れること無く，常に耳を傾け，固定観念に囚われず，その気持ちや価値観を受け入れ，相手の立場に立つよう努力し，その上で自分にできる最大限のことをしていこうとする誠実で謙虚な姿勢ではないだろうか。また，私がいつか自分を信じて何かをしようとする時，その信じられる自分が医の中の蛙であらぬよう，自分を常に客観視し自問自答を繰り返していける人間でありたい。

私は今までに多くの人に出会った。とても苦しい時，優しい言葉をかけてもらった。I 先生「しんどいときはいつでも連絡していいよ」友人 H「まっちゃん，ゆっくりでいいから。自分は自分だけん，大事にして」。モンゴル 800 の歌詞が浮かんでくる。人を支える作業は人にしかできない事なのではないだろうか。私は自分の周りの友人や先生，家族に多大に支えられてきた。その感謝の気持ちを，これから出会う患者さんに少しずつでも返していけたらいいと願っている。

最近出会った患者さんからこの前メールをいただいた。「患者の気持ちを理解してくれる，優しい医者になられると期待しています」と。有難い言葉だ。その期待を裏切らないように努力していきたいと思う。

（まつばら　ゆうこ）

図書館所蔵

『犠牲（ｻｸﾘﾌｧｲｽ）：わが息子・脳死の11日』
916 / Y53 (本館開架)
『犠牲（ｻｸﾘﾌｧｲｽ)への手紙』　同上
『死の医学への日記』　W50 / YAN (分館開架)
『死の医学への序章』　同上

私が出会った一冊

飯塚　舞　（医学部　看護学科３年）

私の人生に関わった一冊，それは柏木哲夫氏の「愛する人の死を看取るとき」です。この本とは，私がこの大学に編入する前に学んでいた看護学校で出会いました。たしか先生の紹介だったと思いますが，この本は私にとって一生忘れることのない本になるだろうと思います。

看護学を学び始めた頃，看護師の役割は病気を患った人が元気に回復できるように関わることだと思っていました。しかし，ターミナルケアという分野に触れ，今まで思っていた看護師の役割との違いにとまどいました。死にゆく人をケアするって，一体どんなことなのだろう･･･。私にとって大きな疑問が生まれたのです。そして，死にゆく人を前にした時，私は看護師としてきちんと関われるだろうか。残された家族にきちんと接することができるだろうか。次から次に疑問が膨らんでいきました。正直，苦手意識さえも生まれていました。そんな時，授業でこの本を紹介されました。何気なく図書館に行き，その本を手にして帰りました。

本のなかには，著書である柏木哲夫氏が実際に体験した話が書いてありました。家族の一員の「愛するひと」がまさに死を目前にし，家族の混乱や葛藤，患者自身の不安な姿が描かれていました。そして医師や看護師がどう接していったのか，とても印象的な部分がありました。「今，不安や不満に思っていること，我々にして欲しいこと何ですか？」と率直に聞くことが大切とありました。あえてこのような質問を直接なげかけることで，患者・家族に話をする機会を与えてあげる。言い出せなかったことや，うまく伝えられなかったことを，ゆっくり聞く。不満や不平を言われても患者や家族から逃げてはいけない。思いを受け止め，最善を尽くす。まさに患者・家族と一緒になって，希望を持ちながら死を迎える準備をしていくという，そんな姿勢にとても心を打たれました。病気が治る患者もいれば，死を迎える患者も必ずいます。人生の最期のときを支えていけるような看護師になりたいと，この本を読んで思いました。

私は落ち込んだり悩んだとき，本を読むようにしています。様々な人の考えや体験談は，自分にとって新しい発見になりとても新鮮です。本は財産と昔から言われるように，心を豊かにしてくれると思います。決して難しそうな本だけが素晴らしいわけではなく，自分の心に響いたものが本当によいものではないでしょうか。これからも，私を元気付けてくれるたくさんの本に出会いたいと思います。みなさんも，素晴らしい本に出会えるよう図書館に足を運んでみてください。きっと新しい発見が待っていると思います。

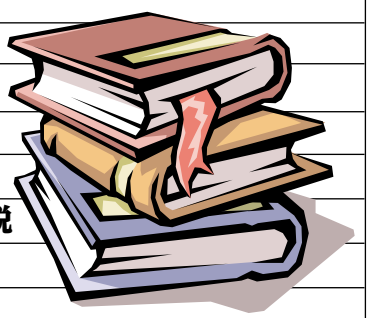
（いいづか　まい）

本学教員著作等寄贈資料紹介

御寄贈くださいました先生方に厚く御礼申し上げます。
今後とも著書等を刊行の際には，図書館に御寄贈くださいますようお願いいたします。

（図書情報係 ／ 医学情報管理係）

坂本一光（副学長）	人間はいつかわかればそれでいい
野中資博，石井将幸（生物資源科学部）	建設材料：地域環境の創造
福田哲之（教育学部）	文字の発見が歴史をゆるがす
	説文以前小学書の研究
高井弘弥，村瀬俊樹（教育学部，法文学部）	子どもの発達心理学を学ぶ人のために
有馬毅一郎（名誉教授）	小学校複式学級における教育内容編成に関する研究：社会科教育を中心にして
島根大学社会連携推進本部	２１世紀を生きるきみたちの環境学習：環境学習プログラム　小学校中学年～高学年編
出口　顕（法文学部）	レヴィ＝ストロース斜め読み
松塚豊茂（名誉教授）	良寛に学ぶ －禅師における他力思想－
林　弘正（法務研究科）	改正刑法假案成立過程の研究
	児童虐待：その現況と刑事法的介入
山口龍之（法務研究科）	隣人訴訟の研究
三保忠夫（教育学部）	古文書の国語学的研究
松崎　貴（生物資源科学部）	最新の毛髪科学
仙田久仁男（生物資源科学部）	日本における地域経済学の理論
舩杉力修（法文学部）	第19回全国天領ゼミナール記録集
内藤正中（名誉教授）	鳥取県下在日コリアンの歴史
岩宮恵子（教育学部）	思春期をめぐる冒険
澤田順弘（総合理工学部）	鳥取県西部地震災害調査報告書
	三瓶埋没林調査報告書［Ⅰ］,Ⅱ,Ⅲ 平10～14年度
	佐田町・横見埋没林調査報告書
渋谷 聡（法文学部）	近世ヨーロッパの東と西
渡邊貞幸（法文学部）	考古資料大観　10　弥生・古墳時代　遺跡・遺構
	前方後円墳の研究
伊藤豊彦（教育学部）	体育・スポーツのサイコロジー
	最新スポーツ心理学
鈴木文子（教育学部）	「もの」から見た朝鮮民俗文化
安井幸彦（医学部）	解剖学
小林祥泰（医学部）	内科学レビュー:最新主要文献と解説
宮崎康二, 秦 幸吉（医学部）	産科婦人科超音波医学
奥西秀樹, 塩田直孝（医学部）	AⅡ受容体拮抗薬のすべて
木下 芳一（医学部）	消化器病診療：良きインフォームド・コンセントに向けて



２００５年主要電子ジャーナル及びデータベースの利用案内

2005年に本学で利用できる電子ジャーナル及びデータベースを紹介します。大規模出版社の外国雑誌について，従来の印刷物形態から電子ジャーナルへメディア形態が変遷したことにより，この特徴を生かして，キャンパスLANからインターネットを経て直接論文が利用できる体制が進行しています。

２００５年に利用可能な電子ジャーナル及びデータベース

種別	出版社　：　商品名	内　　容	収録誌（論文数）
電子ジャーナル	American Chemical Society	米国化学会電子ジャーナル	27
	American Institute of Physics（松江ｷｬﾝﾊﾟｽ）	米国物理学会電子ジャーナル	13
	American Mathematical Society	米国数学会電子ジャーナル	9
	Blackwell : Synergy	全分野	691
	Cambridge University Press	全分野	154
	Elsevier : Science Direct	Freedom Collection : 全分野	1,904
	IEEE : CSLSP-e	IEEE : CSLSP学会電子ジャーナル	20
	Nature Group	Nature & Research誌，EMBO	11
	JSTOR : Art & Sci.　1，General Sci.	人文、科学系コア電子ジャーナル　初号～近刊	194
	Oxford University Press	全分野	163
	ProQuest : Academic Research Lib.	全分野	2,408
	ProQuest : Medical Lib.	医学系電子ジャーナル	571
	Science	一般科学誌	1
	Springer : LINK	全分野	1,147
	Wiley : Inter-Science	全分野	399
	PNAS, JBC etc.	自然科学	40
	Total		7,752
データベース	Current Contents Connect : ABES	Agriculture, Biology & Environmental Sci.	1,100
	Current Contents Connect : ECT	Engineering, Computing & Technology	1,170
	Current Contents Connect : LS	Life Sciences	1,420
	Current Contents Connect : PCES	Physical, Chemical, & Earth Sciences	1,160
	Current Contents Connect : SBS	Social Behavioral Science	1,170
	Current Contents Connect : AH	Art & Humanities	1,120
	Current Contents Connect : CM	Clinical Medicine	1,200
	SilverPlatter : Agricola	農学関係二次文献データベース	(3,800,000)
	SilverPlatter : MLA	言語・文学系文献データベース	4,400
	SilverPlatter : PsycINFO	心理学関係文献データベース	1,350
	MathSciNet	数学関係文献データベース	(16,000,000)
	Journal Citation Reports	分野/Science、自然科学系雑誌引用情報調査	6,200
		分野/Social Science, 社会科学系引用情報調査	1,800
	INSPEC : Engineering Villege 2	物理、電子、情報技術関係二次文献データベース	3,500
	JICST : JDream　（松江ｷｬﾝﾊﾟｽ）	科学技術関係論文・抄録データベース	(15,000,000)
	CiNii　[NII論文情報ナビゲータ]	学・協会誌，和引用文献検索，研究紀要，雑誌記事索引，REO	(18,110,000)
	Ovid : CINAHL　（出雲ｷｬﾝﾊﾟｽ）	看護学関係二次文献	800,000
	Ovid : EBMR　（出雲ｷｬﾝﾊﾟｽ）	Evidence Based Medicine Reviews(医療情報)	―――
	医学中央雑誌Web　（出雲ｷｬﾝﾊﾟｽ）	医学、歯学、薬学関係国内雑誌文献データベース	2,400
	MagazinePlus 1975-Current	国内学術雑誌二次文献データベース	6,000
	SwetScan/SwetsWise	洋雑誌全分野目次データベース	15,000
	法律文献情報データベース	法律雑誌二次文献データベース	(400,000)
	判例体系データベースWeb	判例全文データベース	(569,000)
	官報全文データベース	官報オンライン版	―――
新聞	朝日新聞DNA 1984年8月-Current	朝日新聞Online版,	(3,000,000)
	朝日新聞INDEX 1945-1995	テキスト版，見出し検索	―――
	朝日新聞年間版 1988-2004	テキスト版	―――
	朝日新聞紙面データベース 1926-1945	画像版	―――
	毎日新聞年間版 1991-2004	テキスト版	―――
	読売新聞全文：明治・大正・昭和前期	画像版	―――

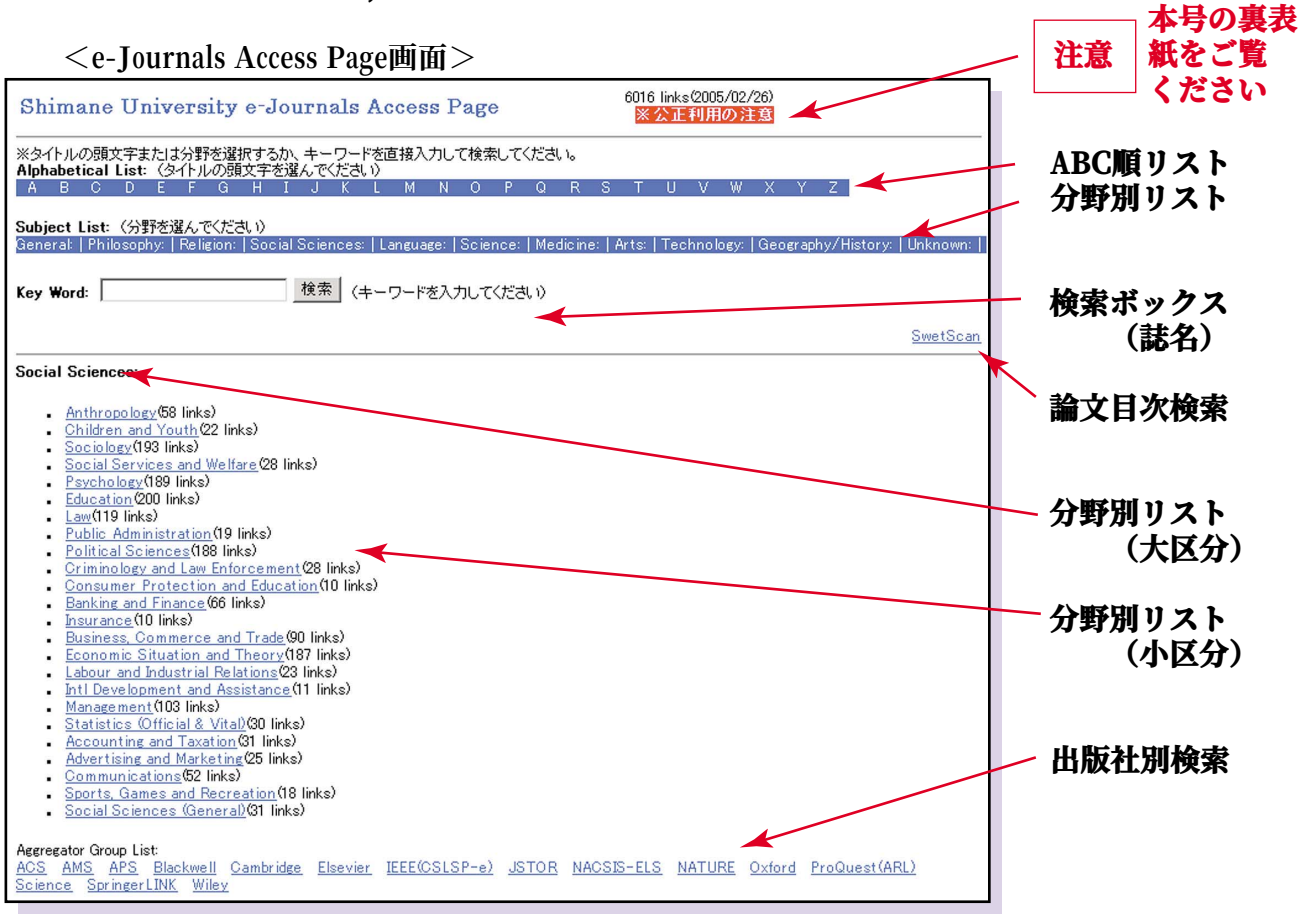
本学でも数年前から学術情報基盤整備計画により，電子ジャーナルの導入を推進してきました。その後，大学統合や法人化移行による経費枠組みの変更，経費節減の中で，電子化及びネットワークによる利用（何時でも、どこでも、学内から自由に利用）へと，従来の方法（購読者＝優先的利用、特定配架場所、複写利用）から変化してきました。そこで，共通性、利用度の高い出版社のジャーナル群を選定し，共通経費化を推進することにより，一定規模のタイトルがキャンパス内から利用できる体制を整備しました。今回、2005年に利用できる主要な出版社，学会系の電子ジャーナルやデータベースを，図書館ホームページ上に設定しましたのでお知らせします。

◆電子ジャーナル利用窓口（e-Journals Access Page）　＜松江・出雲キャンパス共通＞

“e-Journals-Access Page”では，電子ジャーナルを多様なルートから利用するためのリストや検索画面，利用可能範囲の巻号・刊年情報や，印刷体雑誌とのリンク機能などを提供しています。

- 島根大学で利用できる電子ジャーナルのタイトルリスト（ABC順，分野別）
- 出版社別プラットフォーム集（出版社単位で詳細な検索が可能）
- SwetScan / SwetsWiseによる論文，著者名検索，誌名，目次検索・閲覧 etc.
- OPACリンク機能，複数電子ジャーナル選択機能　etc.

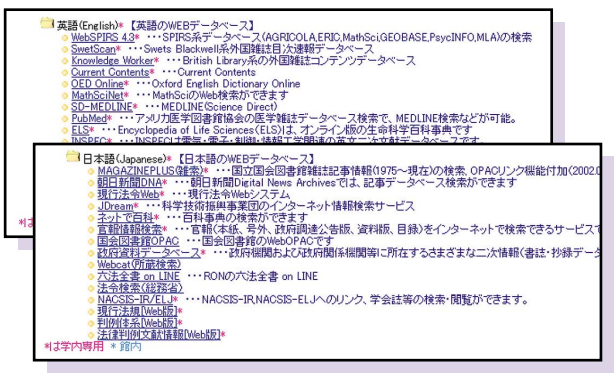
＜e-Journals Access Page画面＞



◆データベース利用窓口

島根大学で利用できるデータベースは，図書館ホームページの「データベース」メニューから提供しています。大部分のデータベースは松江・出雲両キャンパスのサイトが登録済みであるため，ID, Password入力は不要です。

各データベースの検索結果から目的とする電子ジャーナルの論文が直接呼び出せるリンク設定も積極的に進めています。



貴重資料展示公開・電子化プロジェクトについて

附属図書館電子図書館化推進ワーキンググループ

附属図書館では，これまで収集・蓄積されてきた貴重資料やコレクションの利用を促進するため，資料の企画展示，高精細なデジタル画像コンテンツのネットワークによる多様な利活用や，電子メディアでの保存などのプロジェクトを進めています。また，古文書，絵図など貴重な歴史資料を良好な状態で後世に継承するため，原本の保存環境対策についても重要課題として取り組んでいます。

資料展示及び電子化プロジェクトは，附属図書館長の諮問機関としてテーマ毎に各種ワーキンググループを設置し，本学の関連分野の研究室の先生方や学外の研究者，専門家の協力も得て地域連携事業として推進しています。本稿では，本年度のプロジェクトの成果や進行状況，今後の予定などをご紹介します。

＜貴重資料電子化推進WG検討会＞

(1)貴重資料絵はがき

「大学資産の有効活用としての施設及び収蔵品公開プロジェクト（平成15年度教育改善推進事業）」により，図書館所蔵資料のうち，貴重資料を題材として 19 点の絵はがきを作成し，関係機関や地域の方々に配布しています。

＜図書館貴重資料絵はがき＞

（絵はがきセット内容）

A-1（紙本墨書大智度論，日光秘圖志，扶桑拾葉集，隠岐國産物繪圖註書，島根県内農具圖鮮）
A-2（出雲風土記抄，忠度百首他歌書写本，雑兵物語，御國繪圖[天保年間]，鴉鷺合戦物語）
A-3（堀尾時代松江城下図，小泉八雲自筆書簡，景印文淵閣四庫全書，瀧川君山先生故居碑文，交友會誌）
A-4（堀尾時代松江城下図，出雲國繪圖，医師免許状[ｼｰﾎﾞﾙﾄから西山砂保へ]，大同類聚方，乳岩辨症 他）

(2)古文書，コレクション整理作業について

◆医学分館大森文庫

医学分館の大森文庫については，松江市立図書館主催の市民定期講座のテーマにも取り上げられ，華岡青洲関係資料群など日本医学史上，麻酔療法の黎明期の重要な資料群が注目されています。島根県教育庁の梶谷光弘氏や，本学国文学研究室の蘆田，田中両先生のご協力により，現在，資料の調査・整理を行っています。

＜大森文庫調査整理作業＞

◆遺跡資料データベース

遺跡調査報告書は，図書館２階に遺跡資料室を設け集中化し，数年来データベース化などの整備を進めてきました。データベースの特徴である遺跡抄録など詳細なデータ項目の調査・入力は，考古学研究室の教員，学生の方々の協力を得て行っています。

＜遺跡詳細データ入力作業＞

◆古文書分類整理

附属図書館所蔵の古文書や未整理資料について，法文学部歴史学研究室の教員，学生メンバーにより，整理，調査，判読，目録作業などの協力支援を得ています。図書館では，授業・実習のためのスペースを提供したり，原資料の保存環境を改善するための方策を講じたりしています。

＜古文書整理作業＞

(3)高精細画像のネットワーク配信の試行

貴重資料のうち彩色の古絵図など，サイズが大きく，地名等の細かな文字が書き込まれている史料については，画面上での詳細表示や拡大に対応するために，高精細で鮮明な画像を作成する高解像度のデジタル処理が必要です。超高精細画像は情報サイズが非常に大きく，ネットワーク機器や閲覧用パソコンに負荷をかけますが，画像圧縮機能やWeb配信ソフトの利用により，画面上でストレスなく自由に拡大・縮小・スクロールしながら閲覧できます。以下の３点は図書館所蔵資料による試行で，Webブラウザにフリーソフトのプラグインで平易に閲覧でき，画像配信専用サーバでは多様なアクセス・コントロールも可能です。

(4)松江歴史マップ（マルチメディアテーブル版）

城下町松江の時代変遷を，平易な操作でインタラクティブに説明し，多様な展開が可能な“マルチメディアテーブル”用のコンテンツが，「独立行政法人 情報通信研究機構けいはんな情報通信融合研究センター」と島根大学(法文学部地理学研究室，附属図書館)，松江市教育委員会文化財課，松江郷土館，ワコムIT，また，島根大学名誉教授松尾寿氏等，産学官の連携・協力により完成し，平成17年3月9日に附属図書館で，関係者出席のもとで公開・披露されました。

同システムはインタラクティブテーブルとも称され，タッチパネルと同調した音声/赤外線変調照射多チャンネル機能や16チャンネルでの音場制御機能，また，ソフト面でも汎用性のあるWindows/Web環境でコンテンツが作成できるため，イメージ画像を多層化し，時間・空間軸を迅速，自由に移動できるなど，今後，小中学校などの教育現場及び，博物館，美術館や資料館の現場での多様な利活用が期待されます。

マルチメディアテーブルは試作機であり，体験者からは今後の改良に向けての要望や意見が多数寄せられました。同時に作成されたWeb版は，図書館ホームページから公開する予定です。

(5)貴重資料展示公開，電子化プロジェクト

附属図書館では，貴重資料の教育研究での利活用や，地域の歴史的資料の公開を促進するため，平成17年度に電子図書館化推進ワーキンググループのメンバーにより，以下の事業を予定しています。

・小泉八雲自筆書簡を中心とした企画展示，講演会開催及び「Lafcadio Hearnデータベース」構築
・附属図書館所蔵古絵図の企画展示，講演会及び電子化対応
・大森文庫古医学書，国書の企画展示，講演会及び電子化対応

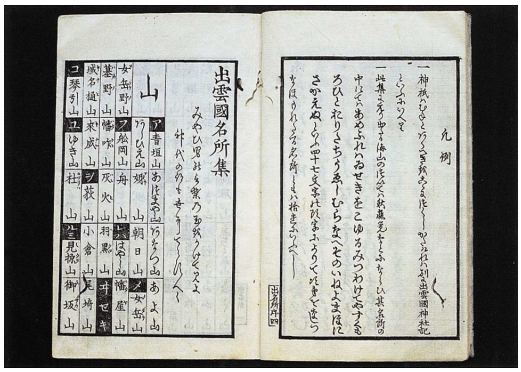
しまだい資料探訪（第2回）

『出雲国名所歌集二編』

蘆田　耕一（法文学部 国文学研究室）

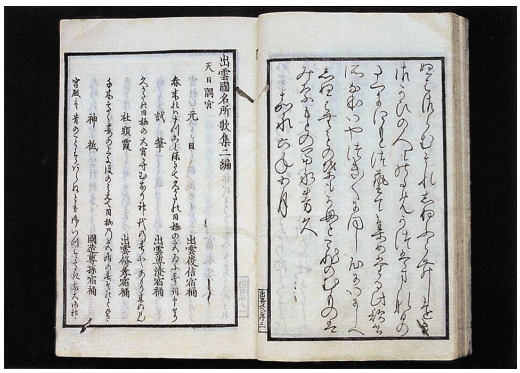
今回紹介するのは，桑原文庫所蔵の『出雲国名所歌集二編』である。

当本は嘉永五年(1852)春板行の『出雲国名所集』と合綴されているが，単独の本も流布している。『名所集』は「山」「嶺」から始まり「村」「駅」まで43項目に分けて出雲の名所が上げられていて，それなりに興味深くはあるが，ここでは割愛しよう。

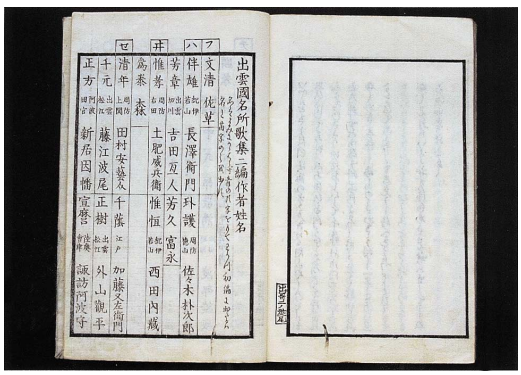


『二編』は嘉永四年八月刊の『初編』を継いで同六年五月に上梓されており，編者はいずれも出雲大社の神官富永芳久（1880年没，67歳）である。

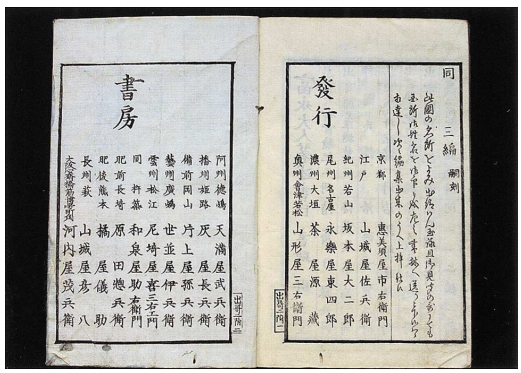
まず，本居豊穎（もとおりとよかい）（1913年没，80歳。本居宣長曾孫）と芳久の序文があり，特に後者では，スサノヲノミコトの「八雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣作るその八重垣を」をもって和歌発祥の地といわれる出雲を詠む，この名所歌集にかける意気込みが披瀝される。



続いて，「出雲国名所歌集二編」の内題が付されて多くの歌が上げられる。そして，和歌作者の在所が示される「二編作者姓名」があり，これは資するところきわめて大きい。



このあと，14点の「富永大人著述書目」がみられ，最後に「発行書房」がある。後者によれば，北は会津若松から南は熊本までほぼ全国にわたっており，16書肆を数える。『初編』の5書肆よりかなり増えており，これは『初編』の評判がよかったからではないだろうか。これらのいわば総元締めにあたるのが，最後に上がる「大阪心斎橋筋博労町角　河内屋茂兵衛」である。



ここで二つ注目しておきたい。一つは「京都」「江戸」に次いで「紀州若山」の書肆がみられること。和歌山は『初編』と同様に『二編』にとっても大事な地であった。江戸末期の出雲歌壇を主導した千家俊信（せんけとしまさ）（1831年没，68歳。芳久の師）が本居宣長の高弟であり，宣長の養子大平（おおひら）

（1833年没，78歳）が和歌山に移住していたからである。いま一つは「雲州松江　尼埼屋善三右工門」「同杵築　和泉屋助右衛門」と地元の2書肆がみられること。前者はまったく不明であるが，後者は大社門前の小間物屋であったことが分かっており，「発行書房」とはあっても今の小売店と考えてよいだろう。

歌の説明に入っていこう。

総歌数は長歌5首を含めて194首である。既存歌集からの拾集もあるが，『初編』の広告に「同二編三編　嗣刻」と予告が載り，それには「此国神代の遺蹟許多伝りて名勝かぞへがたく，古今歌人の風詠史籍諸集に残れるを始旧蹤佳境のいりたるは今古にかゝはらず悉くあつむ。猶諸君子のよみ出給はん玉詠書林へおくり給はらば次々編輯すべし」とみえており，公募されていたようである。

項目の配列は「宮・社」「山」から始まり「村」「雑」「出雲国」で締めくくっており，名所は120にも及んでいる。

このうちのごく一部を取り上げてみよう。「社」に，

遠江より思ふどちおもひおこして
詣ける時によめる
石塚龍麿
はるばるときづきの神の大前に
ぬさ奉るけふぞたふとき

とある「杵築の神」はもちろん出雲大社であり，わざわざ遠江(静岡県)から参詣に来たのである。名所は掛詞として詠まれるが，ここは「来(き)」が掛けられている。同じく，

社頭
尊孫宿禰
豊御酒をかもしの宮の神祭
賑ひまさる御代にあひつつ

の「かもしの宮」は松江市の神魂神社であり，作者は出雲大社国造の千家尊孫。ここも「醸(かも)す」が掛けられる。「松江」は，

松江にて
俊信宿禰
鱸(すずき)つるあまにかあらんみづうみの
沖に小舟のあまたみゆるは

と詠まれ，当時から松江はすずきが有名であったことが分かる。

次に，『出雲国風土記』にみられる地名を詠んだ歌を上げよう。周知のごとく，奈良時代に各国で作られた「風土記」であるが，常陸等五国だけしか現存しておらず，このうち完全な形で残っているのは出雲一国である。

早春霞
小泉真種
一しほの色こそまされふじきみの
山松の葉は霞みそめつつ

とある「布自枳美山」は『風土記』嶋根郡に「布自枳美の高山…高さ二百七十丈，周り二十里なり。烽あり」とみえ，松江市の嵩山である。作者は俊信を師とする松江藩士であり，実景を詠んだものか。

名所山
市岡猛彦
神代よりしらべかはしてかよふらし
琴引山のみねの松風

の「琴引山」は『風土記』飯石郡に「この山の峰に窟あり。裏に所造天下大神の御琴あり…故，琴引山と云ふ」とある。作者は尾張藩士で宣長の高弟。琴と峰の松風が音律の調子を合わせていると詠んでおり，山名の「琴」に引かれた机上の産物であろう。

湖眺望
平井厚信
よそめにはうかぶかとのみ見ゆれども
岩をたためる小嶋なりけり

と詠まれる「蚊嶋」は『風土記』意宇郡に「野代の海の中に蚊嶋あり」とみえ，宍道湖の嫁ヶ島のこと。作者は松江藩士で尊孫を師とする。

作者については，松江や大社（特に神官）の地元歌人が多くを占めるが，たとえば他に紀伊，俊信を師と仰ぐ岩政信比古の在地周防(山口県)，そして宣長の師賀茂真淵の関係からであろう遠江というように諸国にもわたっている。

各地にいくらか現存する名所和歌集が多くは種々の歌集からの拾集で成されているのに対して，『二編』（たぶん『初編』も）は原則として応募作品から選ばれたと思しく，これが大きな特徴となっている。こういうのはおそらく出雲だけであり，ここに編者芳久の労を顕彰しておきたい。

（あしだ　こういち）

「元禄年中松江末次本町町内図」について

舩杉　力修（法文学部 地理学研究室）

昨年１月附属図書館前館長の渡邊貞幸先生から，附属図書館所蔵の貴重資料を紹介する絵はがきを作成するので，絵はがきに使用できる絵図を至急選んでほしいとの要請を受けた。昨年７月開催の第47回歴史地理学会大会にあわせて企画した，島根地理学会・島根県教育委員会・松江市教育委員会・島根史学会共催（大会実行委員会を組織）の企画展「絵図でたどる島根の歴史」を準備している最中であったため，絵はがき掲載用の絵図を検討するだけでなく，附属図書館所蔵の絵図も調査することとした。調査は昨年１月と９月，島根史学会会長池橋達雄先生，島根県立図書館郷土資料係内田文恵氏，飯田奈美子氏，野津薫氏，松江市文化財審議委員乾隆明氏，松江市教育委員会文化財係吉岡弘行氏とともに行った。調査では貴重な絵図が多数発見され，うち１点は池橋先生が「寛永出雲国絵図」を前号で紹介された。今回紹介するのは，城下町松江にかかわる絵図のうち，「元禄年中松江末次本町町内図」である。この絵図は1979（昭和54）年に古書店より附属図書館が購入したものである。

絵図の端には，由緒について次のように記してあった。

此図面元禄年中作之
　于時安政三丙辰年十月五日写之，尤所々
　虫入文字切レ，或者紙欠ケ等有之，名前
　不分ニ御座候　古金屋文兵衛

すなわち，この絵図は元禄年中（1688～1704）作成の絵図を，1856（安政３）年古金（ふるかね）屋文兵衛が写したもので，写した当時は虫によって，文字や紙が欠け，絵図に記載される名前が分からないところがあるとしている。『旧版松江市誌』によると，古金屋文兵衛は幕末には末次本町の町年寄をつとめていた家であった。

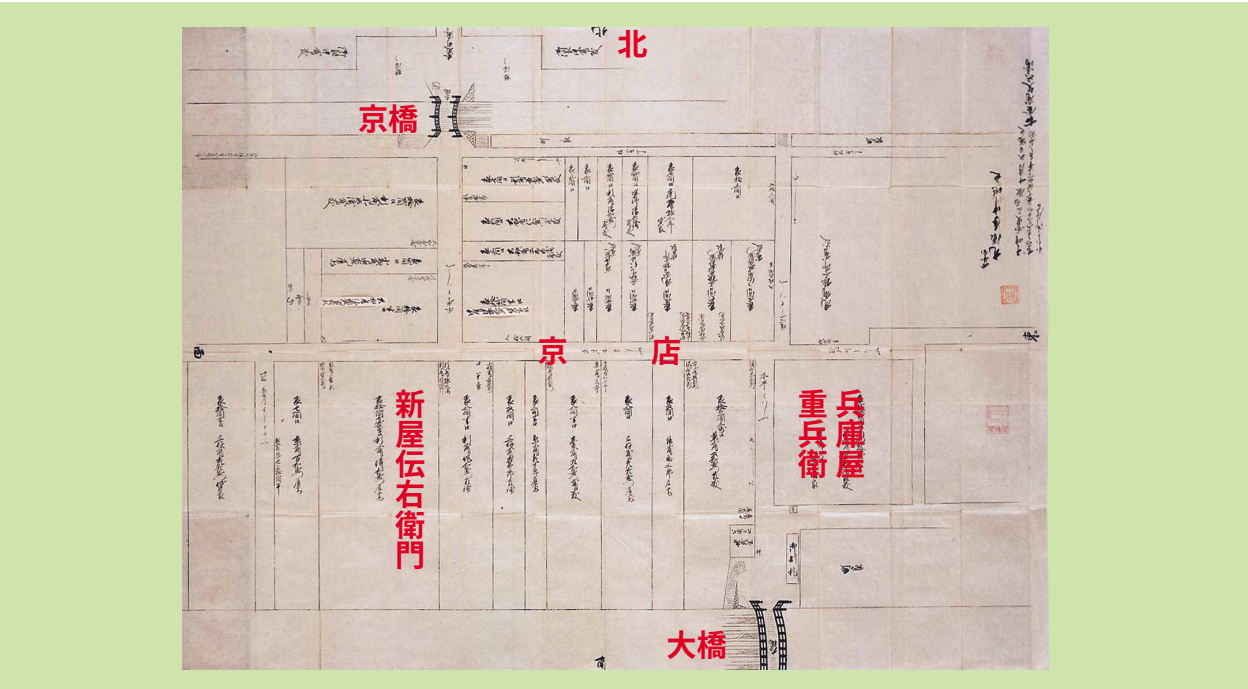
末次本町は大橋川に面し，松江大橋の北側に位置する町人町で，城下町松江における交通の結節点であった。町内には豪商が軒を並べ，白潟本町とともに，町人町の中心であった。末次本町のうち東西の通りは，庇を長くして京風としたことから，京見世（京店）と呼ばれるようになったといわれる。1736（元文元）年には京店の商人が他国物の絹布類や小間物の独占的販売を許可されている（『旧版松江市誌』）。

絵図には，１軒ごとの地割（土地の区画），間口と奥行，居住者（所有者）が詳細に記されている。城下町松江を描いた絵図は，附属図書館所蔵の「堀尾時代松江城下図」をはじめ，城下町全体を描いた絵図がほとんどであったことから，これまで城下町のなかで町家の景観に関してほとんど検討がされていなかった。絵図展の準備の過程で，昨年１月私ども歴史地理学会島根大会実行委員会が松江市城山公園管理事務所において，1840（天保11）年前後に作成された橋南地区の町絵図を発見したが，今回はそれに続く発見であり，城下町松江の景観を復原する上で重要な史料であるといえる。

『旧版松江市誌』によれば，松江では町家の賦課は「小間（こまわり）割」と呼ばれ，間口と奥行の大小によって賦課率が決められていた。小間割は町年寄によって年５回徴収され，町方支配を行っていた大目代所の経費とされたといわれる。したがってこの絵図は，大目代，町年寄などの町役人が，小間割の徴収といった町の職務を行う過程で作成されたと考えられる。

さらに，絵図展準備の過程で，1770（明和７）年の「松江末次商家図」が松江市内で33年ぶりに再発見されたが，この絵図と比較すると末次本町の景観の変化が明瞭にみてとれる。明和絵図では，平田の豪商木佐屋新三郎や出雲郡坂田村（現在斐川町坂田）の豪農勝部本右衛門など，江戸時代中・後期に活躍する松江藩内の有力者が京店付近に屋敷地を所有していることが分かる。しかしこの絵図では記載がみられない。またこの絵図を写し，幕末に町年寄をつとめた古金屋も，明和絵図では記載があるものの，この絵図ではみられない。今後より詳細な検討が必要であるが，この絵図は由緒にあるように，元禄期に成立したものではないかと考えられる。

この絵図の発見によって，今まで明らかでなかった，末次本町で活躍した商人の所在について読み取ることができた。京店や，京店から京橋へ至る通りには，間口が狭く，奥行が長い，短冊状の地割がみられる。なかでも，新屋伝右衛門の屋敷はひときわ大きく，間口18間（約33m），奥行38間半（約70m）にも及んでいた。新屋伝右衛門の屋敷は，京橋から京店へ至る道のつきあたり付近にあり，南は宍道湖に面していた。新屋伝右衛門の姓は滝川で，末次大目代または大年寄をつとめていた。広大な屋敷には，



島根大学附属図書館所蔵　「元禄年中松江末次本町町内図」　91×123cm

度々藩主の御成があったり，他国からの使者のある時は御宿を仰せつけられることもあった。1747（延享４）年から，藩の専売事業であった製蝋事業にかかわり，大橋川沿いの和多見町に蝋実蔵が建設された（『旧版松江市誌』）。絵図をみると新屋伝右衛門の屋敷周辺には，他にも新屋と称する家が複数みられる。特に京橋南詰両側の屋敷はいずれも新屋となっている。滝川家と同様に，白潟大目代をつとめた森脇甚右衛門は，天保期の橋南地区の町絵図をみると，白潟本町に広大な屋敷を構え，周辺には多数の分家が存在していた。今後慎重な検討が必要であるが，町人町の中心であった末次本町，白潟本町共通して，大目代をつとめた本家を中心に，一族の屋敷が形成されていたとすると，城下町の社会構造を考える上で興味深い。

松江大橋から京店を経て，京橋へ至る通りには「貸家」が多数記載されていることも注目される。貸家は豪商の屋敷の軒先にあり，多くは長屋であったとみられる。貸家の屋号をみると，新屋の屋敷前には別の新屋があり，他には帯屋，紺屋などがみられる。こうした商人は豪商の軒先で小間物といった多様な商品を扱っていたと考えられ，豪商とともに，城下町松江の商業を支えていたと予想される。

松江大橋北詰には兵庫屋重兵衛の屋敷が記されている。間口，奥行ともおよそ 22 間（約 40 m）にも及ぶ大邸宅であった。絵図には「四方借家」とあり，屋敷の四方を貸家が取り囲んでいた。堀尾時代の城下町松江の形成について記した「松江亀田山千鳥城取立古説」によると，堀尾吉晴が見立に出かけた際，兵庫屋は吉晴のそばについて世話をしたので，所望通り「町屋敷一番」を与えられたとある。兵庫屋は松江移城の際，寺とともに富田より移ったとされ，1639（寛永16）年には目代として記載があることから，江戸初期には末次で有力な商人であったとみられる。大橋北側の屋敷を「町屋敷一番」とし，城下町建設に協力した豪商へ与えたという話は城下町の形成を考える上で興味深い。

絵図には，桶屋丁・槍物屋丁・燈心丁・紙屋町といった町名の記載もみられる。さらに京店には「京見せといふ」と記されている。従来京店は，1724（享保９）年藩主松平宣維が伏見宮邦永親王の息女岩姫を後妻として迎えた際に，京都三条通りに模して，通りの庇を長くしたのが由来であるとされてきたが，この絵図が元禄期の景観を描いているとすると，従来の説を再検討する必要がある。他にも，藩主松平治郷の時代に漆工として活躍した小島漆壺齋の家と考えられる「塗師清兵衛」が桶屋丁にみられるなど，興味深い記載が多数ある。絵図の分析によって，作成された時代の景観が復原されるだけでなく，社会・経済構造を読み解くことができる。町絵図の発見を契機に，城下町松江の研究，ひいては，わが国における伝統的都市の特質に関する研究が進展することを期待したい。

（ふなすぎ　りきのぶ）

研修報告

韓国慶尚大学校との行政・図書館職員交流研修に参加して

医学分館　医学情報管理係　　山崎月子

平成15年度から島根大学と慶尚大学校との間で始まった職員交流研修の第二回交流員として，平成16年9月13日から24日までの12日間，慶尚大学校中央図書館で研修を行いました。関西空港から約1時間半で韓国釜山の金海空港に到着した時には，韓国は本当に近い国だとあらためて感じました。入国審査もとても簡単なものでした。

慶尚大学校は韓国南部，慶尚南道の晋州市にある，韓国の中でも大規模な大学です。図書館も中央図書館の他に，医学分館，法学分館，文泉閣(漢籍資料館)，海洋科学分館とありました。中央図書館も雑誌，AV関係は別棟（学術情報館）となっており施設は充実したものでした。また，スタッフも多く，正規の職員の他に非常勤職員，学生のボランティア，兵役を免除された男性など，いろいろな人で構成されていました。仕事の分担がはっきりとしていて，それぞれに受け持ちの仕事を黙々とこなしていましたが，非常勤の目録業務担当の女性が困っていると，係員数人が集まって話し合い協力している姿をたびたび見かけました。

慶尚大学校中央図書館で印象的なのは，パソコンの数の多さとそれを利用している学生の多さです。韓国では，図書館が情報センターの役割も担っているようです。また，一部のパソコンルームは業者が直接管理・運営していました。

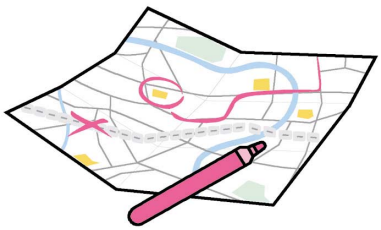
電子ジャーナル，データベースも充実していました。電子ジャーナルはKESLI(Korea Electronic Site License Initiative)が，データベースについてはKERIS（韓国教育学術情報院）がそれぞれコンソーシアムを形成していて，慶尚大学校もそのメンバーです。日本では全国規模でのコンソーシアムはなく，契約内容も大学が個別に業者と交渉していますが，この点韓国では，電子図書館は国家事業のひとつになっているといえるのではないでしょうか。

私は医学分館で仕事をしていますので，こちらの医学分館の見学を非常に楽しみにしていました。慶尚大学校の医科大学は学生数が少ないため図書館は小規模でしたが，学術雑誌は400タイトル余り備え付けてあり充実していました。ただし，電子ジャーナルの利用ができるので，図書館に足を運ぶ利用者は少ないようでした。ここでの主な業務はILLでした。中央図書館ではKERISの目録，ILLシステムを利用していましたが，医学分館では，MEDLIS(Medical Library Information System)という医学専門の目録，ILLシステムを利用していました。日本ではほとんどの図書館が国立情報学研究所の目録，ILLシステムを利用していることを考えると，韓国では専門分野ごとの目録，ILLシステムが確立されているということでしょう。

さて，金海空港に降りた時にはお隣の国という印象だった韓国ですが，2週間近く滞在してみると，日本とは全く違った国でした。生活様式も食事も似ているものがあまりありませんでした。たぶんありきたりの観光旅行では決して見えなかったであろう，韓国の文化が，韓国の人たちとの生活や，仕事を通して少しわかったような気がします。外見は日本人と全く変わらないのに気質は全く違っていました。韓国の人たちは，とても親切で自信と活力にあふれていました。この研修では，素の韓国を味わうという貴重な体験ができました。このような研修を続けることで，韓国と日本が理解を深めていけたらとても素晴らしいことだと思います。

最後になりましたが，韓国語がほとんどわからない私のために，平成15年に第一回目の研修員として図書館に来られた柳さんが，通訳と研修の案内すべてをしてくださいました。ご自分の仕事がほとんどできない状況だったことと思います。あらためてお礼申し上げます。また，研修に参加するにあたってお世話になった本学関係者の方々，慶尚大学校図書館の皆様に感謝いたします。

（やまさき　つきこ）



ポータル（Portal）は，インターネットでWeb情報にアクセスする入り口，玄関として，従来のホームページと同義的に扱われますが，ホームページが不特定多数の利用者を対象に網羅的，組織的に情報発信するのに対し，ポータルは特定の目的や利用者のために，より積極的に集約，カスタマイズして効率的な利用支援を行うサイトと定義することができます。

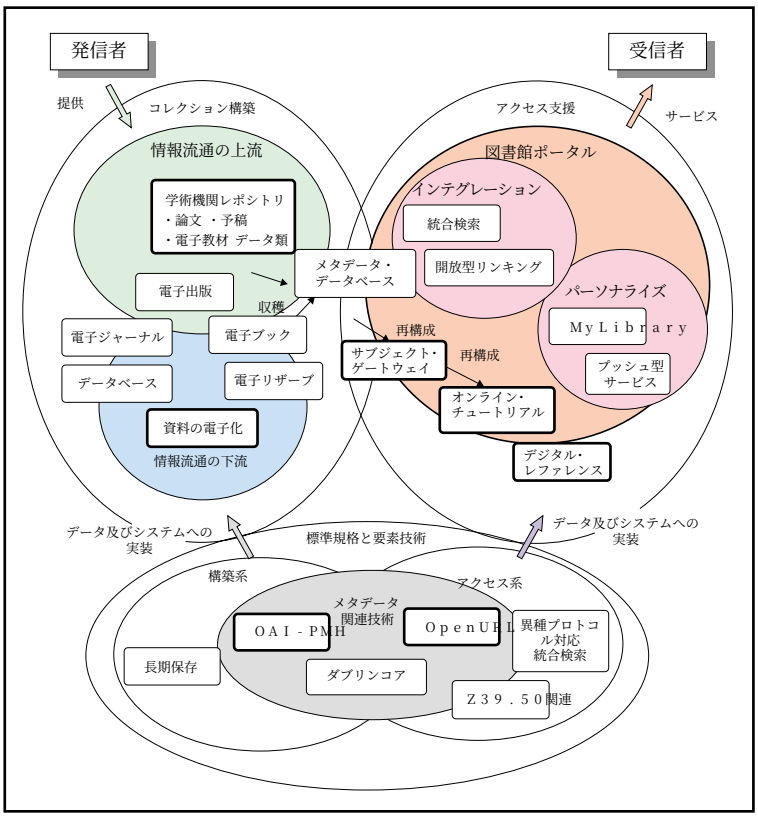
ある利用を想定して，各テーマや目的に沿ったコンテンツを作成し，或いはグローバルに散在する関連情報を分類・配置し，リンク集，データベースやサーチエンジンなどを組み込んで，平易な操作で提供されているものとして，「統計データ・ポータルサイト」，「ブックポータル」や「辞書ポータル」など数多の事例があります。インターネットの情報空間で夥しい情報が溢れ続ける状況から，目的に合致した情報を，対象サイトを特定しつつ効率的かつ継続的に収集するために生まれた機能であるとも言えます。

ポータル

電子情報係　加本純夫

先日，国立情報学研究所で実施された「平成16年度学術ポータル担当者研修」でも，大学の教育研究環境における急激なデジタル学術情報の進行状況と利用支援システムの工夫，また，既存の印刷メディアとの連携利用などについて，多様な対応事例や方向性などが取り上げられました。大学キャンパスでの情報利用窓口である“図書館ポータル”では，契約コンテンツ情報の列挙型から，有料・無料の有用な学術コンテンツを，資料形態に関わらず収集，分類・整理（組織化）し，平易な操作で利用できるシステムの提供も必要とされています。情報化社会における大学図書館（電子図書館）では，所蔵全資料データベース化とオンラインで提供される電子情報との相互連携と提供機能，所蔵コレクションや研究成果の情報発信支援など，益々多様な対応が求められています。（図1.参照）

図1.「新たな付加価値インターフェイス」



電子図書館の新たな潮流 －情報発信者と利用者を結ぶ付加価値インターフェイス－（国立大学図書館協議会図書館高度情報化特別委員会ワーキンググループ報告書2003.5.29）より転載
http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/j/publications/reports/74.pdf

大学の図書館等のホームページは，学内外の利用者に対して，教育研究情報や研究成果情報を蓄積し，一般に公開しています。

ポータルサイトでは，利用者の視点や継続的な利用を想定した配慮，学術関連情報の集約・編集提供，ナビゲート機能の準備，また，ユーザー認証によるカスタマイズやコミュニケーション機能等を付加することで，利用価値が高い情報提供が可能となります。

現在，図書館ホームページの改訂作業を行っていますが，ポータル的機能を採り入れる構成で検討を進めています。平成18年度末更新予定の図書館情報システムでは，“MyLibrary”により，利用機能の集約とカスタマイズ性の向上を目指しています。

＜大学Webサイト資源の紹介＞

全国の大学・研究機関の研究成果，コレクション，データベースなど多様な電子学術情報資源がJuNii（大学情報メタデータ・ポータル)として国立情報学研究所から試験公開されています。１度アクセスセスしてみてください。

URL＝＞ http://ju.nii.ac.jp/

（かもと　すみお）

平成16年度 学術情報リテラシー教育担当者研修を受講して

医学情報サービス係　　松浦めぐみ

平成17年1月19日～21日，大阪大学附属図書館を会場に，大学図書館職員50名参加の研修でした。1日目は，情報リテラシーについての理論を学び，大学図書館における学術情報リテラシー教育の現状として事例報告がありました。事例報告は，情報リテラシー教育のテキストを図書館スタッフが作成した館の事例で，前向きにテキスト作成された経過を聞くことが，やる気と勇気をもらえました。

2日目は，学術情報データベースと電子ジャーナルの動向について講義を受けました。3日目は，プレゼンテーションの技法と，情報倫理についての講義を受け，最後に班別共同討議をして終わりました。全般的に，今まで受講した研修とは違い，実践していくうえでためになることが多く，楽しい充実した研修でした。講師の方が，ヒト・モノ・カネがないのはどこも一緒で，それを言い訳にせず，どうやればうまくいくか工夫して前向きに取り組むことが大事だと言われていたのが印象的でした。まさにそのとおりだと思います。

図書館サービスの向上のためにも，まず図書館がどんな価値，サービスを提供するのか，大学内において積極的なPRが必要だと感じました。現代は情報に溢れていますが，学習・研究において適切な情報を取捨選択できるようになるためにも，情報リテラシー教育に積極的に図書館が関わっていくことが大切だと思います。図書館専門用語を使うのではなく，誰もが理解しやすい言葉を使うのも大切なことだと気づかされました。他大学作成のテキストやホームページなどを参考に，本学図書館のやり方にあった方法を模索していきたいです。すべてを自分達でやろうとするのは限界があります。先進事例に学び，その手法を取り入れることにより，スムーズに業務遂行できると思います。

忙しい時期にこのような素晴らしい研修に参加させていただき，大変感謝しています。利用者の方にもっと図書館を身近に感じていただき，魅力ある図書館になるよう努力させていただきますので，今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

（まつうら　めぐみ）

平成16年度 総合目録データベース実務研修に参加して

雑誌情報係　　小豆沢悦子

国立情報学研究所（NII)において，平成16年11月29日～12月10日の研修に参加しました。

＜全国目録に対する姿勢＞

目録データベース(NACSIS-CAT)の品質低下が叫ばれる中での研修で，講義や課題のテーマも自ずとそちらの方向に向かいます。現在私は図書の目録業務には携わっていませんが，現役担当者の目録作成にかける姿勢には，「ほぉぉ」と唸るものがありました。レベルの差を痛感。

目録業務にとどまらず，最近サービスが始まったポータルサイト（GeNii）など，NIIではたくさんの事業を手掛けておられます。現場を案内していただき，多くの職員の手によって維持され，進化しているのを実感しました。CATは，NIIと多くの参加館担当者によって支えられています。多少なりともデータベースに関わる者として責任と重みを感じます。参加館の理解と協力がますます必要になっていくでしょう。

＜より柔軟に＞

遡及入力業者の徹底した研修，業務管理，データの品質保持のしかた，TRCでの使い易いオリジナルの参照DB，普段学ぶことのできないプレゼンの基本など，講義や見学は大変参考になりました。

演習の課題では，「規則を優先させるか，運用面を優先させるか」が度々問題となりました。規則は必要だけど，作る側の都合ばかりでなく，ユーザー(一般利用者)の立場に立って考えていく姿勢も必要じゃなかろうか。印刷体に限られない多様な媒体が刊行されるようになり，もっと広い知識も必要になっていくでしょう。人といっしょに考えること，違う立場の意見を聞くことも大変意味があります。改めて自分の仕事を見直すいい機会になりました。

総まとめのグループ演習では，雑誌目録とILL業務の改善についてをテーマにし，時間が限られた中，発表まで秒読み状態で資料をまとめあげました。海を越えたILL業務のためにも，信頼できる雑誌データベースの維持に向けて，各参加館（まずは自館から）での取り組みが必要だと思います。

９名という少人数の研修であったため，みなさんの顔や言葉や人柄まで身近に感じることができ，研修なのに何だか心地よい２週間でした。お世話になった皆様，ありがとうございました。

（あずきざわ　えつこ）

図書館からのお知らせ

図書館見学

本館では，図書館を広く知っていただくために，大学内外からの依頼に応じ，随時見学を受け付けています。今年度も様々な団体からの見学がありました。またこのほかに，大学評価に関連した視察等も行われました。

（利用サービス係）

● 平成16年度図書館見学実施状況（2月末現在）●

月　日	見　学　者	人数
8月 6日	ｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽ参加高校生	100
9月24日	鹿島町立鹿島中学校２年生	6
10月 2日	本学公開講座「地域の未来を考える」参加者	14
10月 8日	松江市立川津小学校２年生	35
10月14日	地域連携講座「まつえ市民大学」～IT特別ｺｰｽ～参加者	36
11月18日	島根県立大社高等学校生徒	35
12月 7日	韓国　釜山教育大学校　教授	1
1月17日	釜山日本語弁論大会入賞者等訪日研修団	23
1月24日	社会福祉法人ふらっと 小規模通所授産施設ﾋﾟｰ・ﾀｰ・ﾊﾟﾝ在籍者	10

● 平成16年度視察等実施状況（2月末現在）●

月　日	視　察　者	人数
10月15日	法務研究科年次計画履行状況実地調査 委員及び文部科学省随行事務官	4
11月 8日	JABEE 学外審査員	8
12月15日	経営協議会学外委員	3

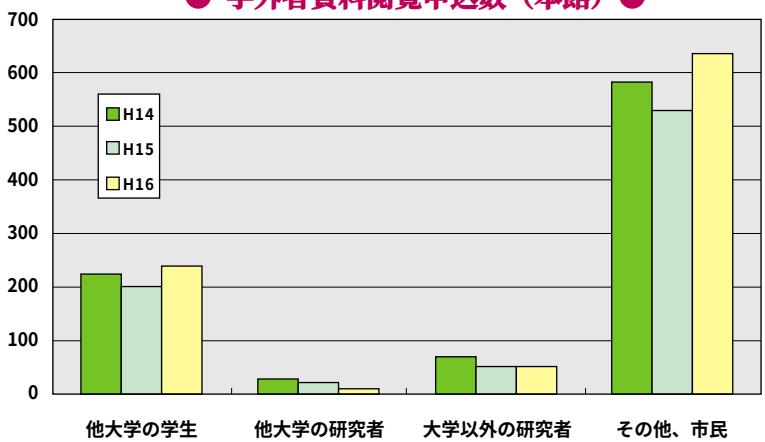
学外者へのサービス・貸出冊数

図書館では，以前から学外の利用者を受け入れてきました。最近は一般市民の方の利用が多く，貸出冊数も年々増加しています。本館では平成15年度には850冊を超え，今年度はすでに900冊を超えています。

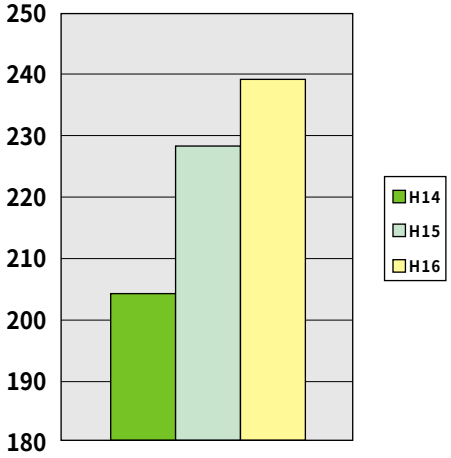
（利用サービス係・
医学情報サービス係）

＊平成16年度は1月末現在

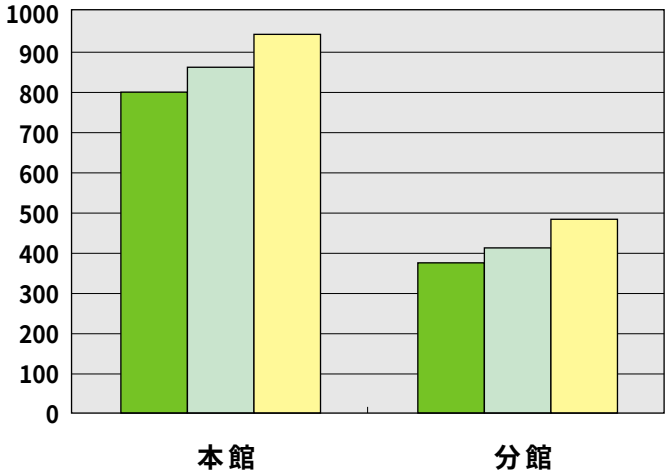
● 学外者資料閲覧申込数（本館）●



● 学外者利用証発行数（本館）●



● 学外者への貸出冊数（本館及び医学分館）●



講習会の開催

● 平成16年度開催講習会（10月以降）●

講 習 会 名	開催月	対 象 者	人数	内 容
情報検索講習会（本館）	10-11月	学部生・院生	169	MagazinePlus, Web等を中心にした検索,CD,DVD 電子ｼﾞｬｰﾅﾙ・Scopus SciFinder Scholar 等
文献検索講習会（分館） －講座等配属時の文献検索説明会－	10-11月	医学科 3年	56	医中誌Web, PubMed , OPACの検索方法 文献オーダーの方法
文献検索講習会（分館） －授業「医学英語」受講の希望者－	11-12月	医学科 1年	21	医中誌Web, PubMed , OPACの検索方法 図書館ツアー

〈注意!〉公正利用のための注意事項

（電子ジャーナルを利用するためのマナー･制約･ライセンス条項等）

電子ジャーナルの利用にあたっては，事前に著作権やライセンス条項に関する＜公正利用のための注意事項＞をお読みください。詳細情報は各出版社のトップページ“Terms and Conditions”等にあります。以下の不正行為については，全学に対して利用停止措置がとられますので絶対に行わないでください。

・個人利用の範囲を超えた大量のデータのダウンロード，プリントアウトは行わないでください。
・特にプログラム等を利用した機器の自動操作による意図的な大量のデータ収集は，厳禁されています。
違反した場合，ペナルティとして全学的なアクセスが一定期間禁止されます。

［表紙写真　落合輝満］

島根大学附属図書館報「淞雲」　第４号
平成１７年３月発行

発行　島根大学附属図書館報編集委員会

本　　館　〒690-8504 松江市西川津町1060
TEL (0852)32-6083　FAX 32-6089
医学分館　〒693-8501　出雲市塩冶町89-1
TEL (0853)20-2092　FAX 20-2095